自分で自分を作りゆく

私たちの騰々舎（とうとうしゃ）は最重度の障がい者の生活施設で、ささやかながら、「最重度最優先入所」の小さな旗印を掲げている。毎年新卒一、二人が採用され、停滞しがちな施設生活にそよ風を送ってくれる。宮崎県の短大卒の鬼塚まゆみさんもその一人、施設の「月報」でのあいさつ文。

―この一年あっという間にすぎてしまいました。初めは心の中で、話しやすい人（介助しやすい人）とそうでない人とに分けてしまって、できれば楽な人の方に行きたいと思ったりしていました。しかし、そんなことを思う自分に気付くとどんどん自分が嫌になっていきました。このまま仕事を続けていったら、もっともっと自分の嫌な面を見なければならない。〝この仕事に向いていないのでは〟と何度も悩みました。

ある時、少しいやなことがあり、気分がすぐれないまま介助に行きました。すると、その人から〝ゴメンネ〟と言われたのです。私はハッとしました。その人は私に介助を頼んだことを、私が気を悪くしたと思ったのです。うまくかくしたつもりでいたの

に、その人にまでいやな気持ちにさせてしまっていたのです。

宮崎の実家に帰って、また騰々舎に戻って来る車の中で涙が止まりません。仕事に戻りたくないっ。でも施設に帰って利用者の人達の顔を見たとたん、とてもホッとしました。なぜか嬉しくてならなかった。こんな気持ち初めてです。ああ、仕事を続けてよかった。私の仕事はこれからです―。

長い引用になったが、一字も削れないほどの初々しさとふれあいの温かさと人間であることの悲しさが脈打っている。ひとはこうして、ひとからの働きかけをわがものとしながら、一生かけて、自分で自分を作っていく。ことしも新卒二人が入ってきた。若き先輩に続くがごとく。

（一九八九年四月二十一日）